



2002年1月4日 初顔合わせ (本部事務所にて)

## もくじ

- |   |   |
|---|---|
| <p>P. 2</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 退任の辞</li> <li>● 林野評議員 勲三等叙勲祝賀会</li> <li>● 韓国畿甸文化財研究院の金武重<br/>先任研究員が当センターで研修</li> </ul> <p>P. 3</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 評議員会・理事会</li> <li>● 平成13年度文化財講座</li> </ul> <p>P. 4</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 平成13年度速報展「大河内展」</li> </ul> <p>P. 5</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 郷土の文化財を見学する会</li> <li>● 第44回大阪府埋蔵文化財研究会</li> </ul> | <p>P. 6</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 発掘速報           <ul style="list-style-type: none"> <li>* 久宝寺遺跡<br/>(水処理施設その1)</li> <li>* 勝部遺跡 (その2)</li> </ul> </li> </ul> <p>P. 7</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 全埋協 韓国研修</li> <li>● 全埋協 中国研修</li> </ul> <p>P. 8</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● トピックス           <ul style="list-style-type: none"> <li>* 志紀遺跡の石小刀</li> <li>* 平成13年度刊行図書</li> </ul> </li> </ul> |
|---|---|

## 退任の辞

調査部長 井 藤 徹

平成7年4月1日に(財)大阪文化財センターと(財)大阪府埋蔵文化財協会が統合して、新しい(財)大阪府文化財調査研究センターが発足すると同時に調査部長を拝命し、7年間の長い間お世話になった。私は文化財保護課で新しい組織を作った時には、必ず何かの形で関係してきた。(財)大阪文化財センター発足時には、技術主幹の委嘱(昭和48年1月10日～昭和53年3月31日)を受け、(財)大阪府埋蔵文化財協会が発足した時には、調査課長を(昭和61年5月1日～平成元年3月31日)拝命し、私の文化財保護課での業務の中では法人事業関係が大きな部分を占めてきた。この経緯から、時たま古い事例を出してきては色々と物事を指示したことや、行政と法人の間を行き来しているためにどちらの基準で物事を判断しているか不明で、多くの人が困ったのではないかと思う。このように私の個人的な性格が強くて出たにも拘わらず余り修正せずに業務をやらせて貰ってきた。

(財)大阪府文化財調査研究センターの発足した時には、文化財の調査以外に研究並びに文化財の活用にも積極的に取り組み、今までの法人と異なる特色を持つことも目的とし、史跡整備事業、総合調査等を積極的に取り組み、広範囲な文化財領域を手掛けることに意を注いだつもりである。

今後は、これらの業務を引き継がれ発展させてもらえればと思っている。また、最近法人の文化財調査を行う環境が大きく変化している。例えば調査成果の捏造問題、調査基準の制定、文化財保護法の改正、地方分権の動き、公共工事の削減、民間調査機関の台頭等多くの対応しなければならない課題が出ている。以上の問題は一法人だけでは解決しないが、法人が目指すべき方向を早く示していくことが求められるのではと思っている。これからは、調査の経費や期間がこれまで以上に削減した上で十分な成果を上げる努力に尽きるのではと思う。このことは非常に難しいもので、調査を担当する職員が常に心がけ普段に努力をしなければ成果が上がらないものである。4月以降には、(財)大阪府博物館協会との統合により新しい法人として出発するに当たり、これまで以上に文化財調査が充実されるものと期待いたします。

最後になりましたが、長い期間にわたり私を支えて頂いたことに感謝いたします。



## 林野評議員 勲三等叙勲祝賀会

当センター評議員で京都府立大学名誉教授の林野全孝先生が、今秋勲三等瑞宝章を受章されました。先生の受章は、建築史におけるあまたの業績が評価されたものです。それを祝う会が、2月9日(日)ホテルアウイーナ大阪で開催されました。教え子やお世話になった人達が多数駆けつけ、盛会となりました。当センター理事の堅田直希塚山大学名誉教授も、長年の親交に触れた祝辞を述べられました。



ご挨拶される林野先生 (写真提供 京都府立大学)

## 韓国畿甸文化財研究院の 金武重前任研究員が当センターで研修

韓国の京畿道水原市にある京畿文化財団附設畿甸文化財研究院の前任研究員である金武重氏が、(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所の招きで、文化財保護に関する研修のため、本年1月5日～2月28日まで来日された。この間、文化遺産保護協力事務所の要請を受け、2月4日～8日の間、当センターでも研修のため、金氏を受け入れることとなった。

金氏は崇実大学校人文大学史学科助手、同 大学校博物館助手、国立中央博物館考古学芸員、韓国高速鉄道公団文化財担当官等を経て現職に着かれるいっぽう、現在、崇実大学校博士課程に在籍中でもある。

日本に滞在中の具体的な研修内容は、(1)埋蔵文化財の発掘・整備・保存活用、(2)近畿地方の埋蔵文化財センター運営の現状、(3)弥生時代から古墳時代初期の上器の生産と分配状況、(4)同 集落と古墳の状況、(5)弥生時代・古墳時代の遺跡見学等ということであった。

2月4日には、日本における埋蔵文化財発掘調査体制の歴史、財団の現状、当センターの運営状況等について、限られた時間ではあったが説明を行った。金氏は日本でのこうした事情についてかなり通じておられた。その後、調査

## 平成13年度文化財講座

今年度の文化財講座は、「新しい縄文時代像を語る」というテーマで開催。ここ20年来的縄文研究の到達点といえる新しい縄文時代像—1万年続いた縄文時代—豊かな自然・定住集落・狩猟採集生活をキーワードとする豊かな縄文社会と考えることができる。現代の物質文明社会の豊かさとは違う縄文社会の豊かさ。それを考えることは、これからの私たちのあるべき姿を考えることともいえるのではないだろうか。

今年度は、受講者延べ人数は1,603名、全講座受講者は46名である。最も多い時で193名、少ない時で132名（会員235名）と定員180名の会場は熱心な会員の方々で盛況であった。

- 第1回 5月10日（木）  
 「縄文祭式とわたし」  
 水野正好氏（財）大阪府文化財調査研究センター理事長
- 第2回 6月14日（木）  
 「縄文文化研究の東北地方の現状」  
 富原泰時氏（秋田県立博物館館長）
- 第3回 7月12日（木）  
 「上野原遺跡と南九州の縄文文化」  
 新東晃一氏（鹿児島県教育庁文化財課主任文化財主事兼縄文文化財係長）
- 第4回 8月9日（木）  
 「真鶴遺跡から学ぶ」  
 橋本澄夫氏（金沢学院大学教授）
- 第5回 9月13日（木）  
 「縄文時代拠点集落の建築構成」  
 宮本長二郎氏（東北芸術工科大学教授）
- 第6回 10月10日（木）  
 「縄文時代の食生活」  
 小宮 孟氏（千葉県立中央博物館歴史学研究室長）
- 第7回 11月8日（木）  
 「縄文の漆文化」  
 岡田文男氏（京都造形芸術大学教授）
- 第8回 12月13日（木）  
 「縄文農耕と縄文社会」  
 宮本一夫氏（九州大学大学院人文科学研究科助教授）
- 第9回 1月10日（木）  
 「縄文社会の豊かさ」  
 西田正規氏（筑波大学歴史・人類学系教授）
- 第10回 2月14日（木）  
 「私たちと新しい縄文時代」  
 泉 拓真氏（奈良大学教授）



古市分室で資料調査中の金氏

事務所や分室、久宝寺遺跡、新上小取遺跡、池島遺跡、勝部遺跡などの発掘現場等を視察、また、清峰遺跡、尺度遺跡、大庭寺遺跡、男里遺跡、亀川遺跡などの出土品の調査等も行われた。庄内式土器等についても詳しい知識を持っておられ、久宝寺遺跡の現場事務所では、土器を観察しながら、詳細な意見の交換が行われた。各事務所等でも熱心な研修と交流が行われ、最終日には、大きな成果があったと感謝の言葉を述べられたことであった。当センターにとっても、韓国における埋蔵文化財調査の現状を知る良い機会となったことはいままでもない。今後ともこうした交流を発展させていきたいと思う。

## 評議員会・理事会

### 〔平成13年度第3回評議員会〕

平成14年2月12日（火）、ホテル アウィーナ大阪で本年度第3回評議員会が開催され、（財）大阪府博物館協会との統合に伴う寄附行為の変更について、原案どおり承認された。

また、次のとおり理事を追加選任した。

伊賀節郎〔（財）大阪府私学総合協会代表〕、石毛直道〔国立民族学博物館館長〕、岩田光利〔大阪府立図書館協議会会長〕、大橋太朗〔阪急電鉄（株）代表取締役社長〕、大庭 脩〔大阪府立近つ飛鳥博物館館長〕、佐々木高明〔国立民族学博物館名誉教授〕、末次攝子〔（財）高槻市文化振興事業団副理事長〕、藤 洋作〔関西電力（株）取締役社長〕、町田 章〔独立行政法人文化財研究所理事 奈良文化財研究所所長〕、森下洋一〔松下電器産業（株）代表取締役会長〕、笹本新一郎〔大阪ガス（株）代表取締役会長〕

任期：自平成14年4月1日 至平成14年11月26日

### 〔平成13年度第3回理事会〕

平成14年2月12日（火）、ホテル アウィーナ大阪で本年度第3回理事会が開催され、（財）大阪府博物館協会との統合に伴う寄附行為の変更について、原案どおり承認された。



第4回講座 橋本澄夫先生

## 平成13年度速報展「大河内展」

第7回目を数える今年度の速報展は、「大河内展－弥生社会の発展と古墳の出現－」と題する、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての河内平野の歴史を明らかにするテーマ展示である。11月にオープンした大阪歴史博物館を会場に、平成14年1月17日（木）～2月18日（月）、文化庁・大阪歴史博物館主催の特別展「発掘された日本列島2001－新発見考古速報展－」同時開催地域展としての開催となった。期間中の行事として講演会、調査成果報告会を行った。今年度は、大阪歴史博物館、(財)大阪市文化財協会、当センター三者の共催で、朝日新聞社、NHK大阪放送局の後援を得ることができた。

今年度の速報展は、当センターでは近畿自動車道の関連遺跡15遺跡の発掘調査報告書（「河内平野の動態」）作成が終了したことであり、又、加美遺跡、長原遺跡等大阪府域で大きな調査成果をあげておられる市文協と両者の出土品を中心に展示を計画。

展示構成は、弥生社会の成熟・変貌する弥生社会・古墳の出現という三部構成でその前後にプロローグ・エピローグを設け、プロローグとして年輪年代学の最近の成果と河内平野の変遷をパネルで紹介し、エピローグは古墳時代を象徴する柏原市松岳山古墳の餅付楕円形埴輪を展示し古墳時代の繁栄をイメージした。「弥生社会の成熟」では亀井遺跡、加美遺跡、経屋遺跡、東奈良遺跡、鬼虎川遺跡等を中心に弥生時代中期の最も繁栄した弥生社会の姿を展開し、「変貌する弥生社会」では弥生時代後期に焦点をあて、星丘遺跡鍛冶資料・各種の鉄製品、鋳型を始めとする鋳造資料や連鋳式銅剣・巴形銅器・鏡・小銅鐸等から鉄器・青銅器生産の普及を、船・各地産の土器・分銅形土製品・貨幣・四神鏡等から他地域や半島や大陸との盛んな交流の様子と古曽部・芝谷遺跡、観音寺山遺跡で激動の時代を象徴する高地性集落を展示。そして、「古墳の出現」へと進み、加美遺跡・久宝寺遺跡・安満宮山古墳・茶臼塚古墳・直張文等により古墳の出現期から前期にかけての姿を展開した。

展示資料は、当センターは亀井遺跡等17遺跡、39種161

点、(財)大阪市文化財協会は加美遺跡等4遺跡、20種52点、大阪歴史博物館は2遺跡、2種2点である。そして、文化庁、国分神社、高槻市教育委員会を始めとする市町村教育委員会、同志社大学歴史資料館を始めとする博物館等21機関から46遺跡、84種364点をお借りし、展示のイメージをふくらますことができ、感謝の気持ちで一杯である。総合計67遺跡、111種580点の展示となった。今年度の調査速報として久宝寺1号墳の割竹形木棺や供献土器等一括資料を展示することができた。また、模型やイラストパネルは、分かり易い展示との感想を耳にしたが、その一助になり展示会に華を添えてくれた。

展示期間は29日間と短期間であったが、入館者総数は20,891人とこれまで最多の入館者数になった。やはり、大阪の中心部に位置し好条件が揃っている博物館ならはとえられる。さらに市内小中学校からの見学も数多く、博物館の方々の努力も見逃せない。

期間中の行事として、講演会3回、調査成果報告会を開催し、会場である定員270名の大阪歴史博物館4階講堂は平均209名と盛況であった。

### 講演会

1月19日（土）午後2時～4時

「弥生文化の系譜」

大阪府立弥生文化博物館長 金関 勉氏

1月26日（土）午後2時～4時

「河内の原像・弥生の社会」

奈良大学教授 酒井龍一氏

2月2日（土）午後2時～4時

「常陸台国から大和政権へ」

大阪大学助教授 福永伸哉氏

### 調査成果報告会

2月9日（土）午後2時～4時

「大阪府域の弥生時代遺跡－最近の調査成果から－」

(財)大阪市文化財協会学芸員 大庭重信氏

「久宝寺1号墳の調査」

(財)大阪府文化財調査研究センター技師 西村 歩氏



展示会場風景 (写真提供 大阪歴史博物館)



ご講演中の金関先生 (写真提供 大阪歴史博物館)

## 郷土の文化財を見学する会

第9回例会(291回)は、新年早々の1月19日(土)、大阪歴史博物館の特別展示「新発見考古速報 発掘された日本列島2001」『発掘速報展 大阪 大河内展』を観ました。参加者は118名でした。特別展示室に並べられた文化庁の中核展示と地域展『大河内展-弥生社会の発展と古墳の出現-』を見ました。弥生時代から古墳時代前期にかけて激しい河内に焦点を当て、河内の歴史像を展開した展示です。安満宮山古墳から出土した三角縁神鏡や、久宝寺1号墳出土の湖竹形木棺など貴重な遺物を見学しました。

第10回例会(第292回)は、2月10日(日)、「泉南郡 柳町字度墓古墳(宇度墓五十瓊敷入彦命)と西陵古墳を訪ね、その周辺の文化財を学ぶ」ことをテーマに柳町を訪れました。89名が参加しました。見学コースは南海本線淡輪駅から宇度墓の周囲を廻り、陪塚のすべてと既往の調査区を廻りました。その後この地域の中心的な遺跡である淡輪遺跡を訪ね、既往の各調査区を廻りました。その後湯ノ塚山1号墳の和泉砂岩で造られた石室を見学しました。昼食の後淡輪地区が一望に望める西小山古墳の墳頂に立ち周囲の歴史的環境を学びました。西陵古墳では木々が鬱蒼と繁った墳丘内に入り、非常に遺存状況の良いマウンドを歩いて前方後円墳の細部を学びました。その後、真鍋山古墳を経

て白崎山古墳の特異な横穴式石室を見学して、みさき公園駅前で解散しました。途中あられが激しく降る時もあった寒い一日でした。大阪の南端の伏魔な地になぜ大きな古墳が2基も造られたかを考えました。

今年度も大阪府内の一般には余り知られていないが、発掘調査された遺跡を中心に廻り、足元に埋もれたままになっている歴史を再認識しました。



第10回例会 西小山古墳墳頂にて

## 第44回大阪府埋蔵文化財研究会

第44回大阪府埋蔵文化財研究会は、「2001年度の大阪府内の発掘調査成果と記念講演」と題して、平成14年2月17日(日)午前9時50分からエル・おおさかで開催しました。記念講演は2本行いました。(財)大阪市文化財協会 永島輝臣氏は、「朝鮮考古学の過去と現在」と題して、日本の朝鮮考古学が日本の考古学に都合の良い箇所だけを取り上げて、朝鮮半島の歴史の変遷を抜きに考えてきた問題点を指摘されました。また、当センター井藤徹氏は、「大阪府の埋蔵文化財調査に大きな影響を及ぼした遺跡あるいは調査事例」と題して、埋蔵文化財行政草創期にどのようにして文化財を保護してきたかについて語られました。

発表は5本あり、まず「難波宮跡八角殿院付近の調査成果」と題して、前期難波宮八角殿院回廊と内裏前殿の東に位置する東長殿の調査成果を(財)大阪市文化財協会の李陽浩氏が発表されました。また、大阪府警本部建設敷地内から出土した木簡について、当センター 福岡澄男が、「難波宮跡出土の「秦人凡国評」木簡をめぐる」と題して発表し、出土木簡の表記法と孝徳朝期の立評を考え、「日本書紀」の大化の改新の詔が史実を表したとの見解を示されました。「泉南市男里遺跡の調査」では、当遺跡は住居が30棟以上あり、南北300m、東西200m以上の範囲になる泉州南部の拠

点集落と当センター 中村淳蔵が発表されました。「三日月北遺跡の調査」では、当遺跡周辺に弥生時代から古代の遺跡がまともっている事と、弥生時代に長期開墾された事を、河内長野市教育委員会 太田宏明氏が報告されました。「九頭神遺跡第168次調査の概要」では、この遺跡に九頭神廟寺に伴う道路状遺構や地割りが存在し、周辺の開発についての新しい知見を(財)枚方市文化財研究調査会 西田敏秀氏が報告されました。



記念講演される井藤部長

## 発掘速報 久宝寺遺跡（水処理施設その1）

久宝寺遺跡は八尾市の北東部を中心に、大阪市・八尾市に広がる南北約1.6km、東西約1.7kmの範囲の縄紋時代から近世に至る複合遺跡である。今年度の調査は、JR大和路線久宝寺駅の西側において、寝屋川流域下水道竜草水環境保全センター水処理施設等の建設に伴い、西と東をそれぞれ（その1）・（その2）と称して発掘調査を行っている。その結果、調査区の南西部で古墳時代初頭の方形周溝墓4基、古



6号墳主体部検出状況（北より）

墳時代初頭から前期にかけての方墳を北側で3基、北東部で5基確認した。北東部で確認した5基の古墳の内、2基の古墳は主体部を残しており、久宝寺6号墳と呼称した古墳の西側の周溝内でも墓域を確認することができた。

久宝寺6号墳は、墳丘規模を南北7.2m、東西7.0mの方墳である。中心主体部は南北3.6m、東西1.4mの墓域で、湾曲した棺蓋と棺身に、N-30°-Eで北頭位の人骨を確認した。副葬品は出土していない。木棺材はコウヤマキである。また、西側の周溝で確認した墓域は長さ2.1m、幅0.54mである。組合せ式木棺の遺存状況は悪かったが、底板の直上にS-55°-Wで南頭位の人骨を確認した。副葬品は出土しなかった。この6号墳の西側で確認した久宝寺7号墳も木棺を比較的良好に残す古墳であった。墳丘規模を南北7.1m、東西6.8mとする方墳である。墓域は長さ1.34m、幅0.7mであった。組合せ式木棺を主体部とする。棺蓋及び底板、東側で副葬品を確認したものの人骨・副葬品は確認しなかった。木棺に用いられた材は6号墳と同じくコウヤマキである。

また、このほかにも一辺3mの古墳や北側では歯牙を良好に残す頭蓋骨が主体部から出土した古墳等があり、当地での墓制を考える上で重要となる資料が蓄積されつつある。（後川忠太郎）

## 発掘速報 勝部遺跡（その2）

勝部遺跡は猪名川東岸の沖積地に位置し、大阪国際空港拡張工事の際に弥生時代中期の木棺墓がまとまって調査されたことで著名な遺跡である。今回の発掘調査は、空港周辺緑地整備に伴うもので、年度前半に実施した確認調査に続き、造成用地北半分の範囲を対象に本調査を実施した。

周辺は条里地割が良好に遺存する地域であり、中世以降は水田として利用されていたものと考えられる。この条里



弥生時代後期・古墳時代前期・鎌倉時代の遺構面（東半分）

水田に伴う作土層を除去した段階で、鎌倉時代、古墳時代前期、弥生時代後期を中心とする遺構を検出した。

鎌倉時代の遺構は集落に伴うもので、掘立柱建物や井戸、土坑（水溜め）、溝などがみられる。建物は3棟以上が存在し、柱穴に根石を残すものや、柱の抜取時に瓦器陶を埋納したものなどが含まれる。井戸は6基を確認したが、井戸間は木（竹）枠、曲物、土釜積など多様である。溝は区画溝と考えられるものの他に、壁立の構造物（建物？）の可能性が高い。底に杭の痕跡を多数残すものも含まれる。溝や建物の方向から条里景観内に配された集落であると考えられる。

古墳時代前期の遺構には溝や土坑が少数みられ、条里方向にのらない掘立柱建物もこの時期に帰属する可能性がある。また遺構に伴うものではないが、鋸歯文、斜格子文を持つ初期須恵器器台が出土している。

弥生時代後期の遺構には溝があり、土器がまとまって出土した。この遺構面のベースとなる砂層は弥生時代後期に下層流路を埋没させた洪水に起因するもので、流路内からも弥生土器が多く出土している。部分的な調査にとどまったが、この下層の遺構面では流路以外に水路や水田畦畔を確認しており、弥生時代の水田景観が広がっていた可能性が高い。（手島美香・森本 徹）

## 全埋協 韓国研修

11月5日～10日までの日程で北海道埋蔵文化財センター、山形県埋蔵文化財センター、茨城県教育財団、千葉県文化財センター、大阪府文化財調査研究センター、山口県教育文化財団の5団体から11名が参加し、実施した。

第1日：まず、昨年3月に開港したばかりの仁川空港に到着し、そのままソウルに向かう。

第2日：ソウルでは朝鮮王朝の離宮の昌徳宮（世界遺産）、伝統的建築と西洋建築が調和した景福宮、国立中央博物館を見学した。水原に移動し、朝鮮王朝時代に遷都を目的として築かれた水原城（世界遺産）を見学した。

第3日：公州では武寧王陵の出土品を中心に展示する国立公州博物館、「百濟王陵の谷」と呼ばれる末山里古墳群、5～6世紀前半にかけての百濟の都であった公山城を見学した。大邱に移動し、国立大邱博物館を見学した。

第4日：大邱において嶺南文化財研究院の案内で、5～7世紀の陶質土器の窯跡である玉山洞窯跡群、文山里古墳群の発掘調査を見学した。高靈に移動し、大伽耶の代表的な古墳群である池山洞古墳群と大伽耶王陵展示館を見学した。

第5日：陝川において4～6世紀の古墳18基からなる玉田古墳群、威安で阿羅伽耶文化の道項里古墳群、未

伊山古墳群、昌原で城山貝塚を見学する。そして、最後の研修地である金海市に移動し、伽耶文化の集大成である国立金海博物館、伽耶の始祖といわれる首露王の王妃、首露王妃墓、日本文化と関わりの深い大成洞古墳群を見学した。

第6日：釜山の金海空港から帰路につく。

独行軍の6日間ではあったが、特に我が国との関わりの深い伽耶文化を中心に研修することができたことは非常に有意義であった。

(橋本高明)



文山里古墳群

## 全埋協 中国研修

平成13年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修として、平成13年11月30日（金）～12月7日（金）の8日間の日程で、黄河流域を巡りながら現場担当者との交流と発掘調査実習も実施された。参加は15法人（24名）で、各地域の考古学研究所で懇切丁寧な説明を受けた。研修日程は次の通りである。

11月30日 上海での結団式

12月1日（咸陽—西安）陽陵邑での発掘調査実習・陽陵陳列館・陝西歴史博物館の見学

12月2日（西安）秦始皇陵陪葬坑発掘現場・兵馬俑博物館・半坡遺跡博物館・陝西省考古研究所の見学

12月3日（三門峽）三門峽市博物館・カク国軍馬坑陳列館

12月4日（洛陽）仰韶村文化遺跡の土層断面展示館・洛陽考古博物館・洛陽市博物館の見学

12月5日（洛陽）竜門石窟・洛陽市第二文物工作隊研究所（1998年10大考古発見の一つ小浪底後漢清運建築遺跡の報告を聞く）・洛陽宮の水寧寺址史跡整備現場の見学

12月6日（鄭州）河南博物院の見学

12月7日（上海）上海博物館の見学

今回の研修には学史に残る有名な遺跡見学があり、世界遺産を二つも訪れ、中国の発掘調査の現状を実体験できるという好運に恵まれた研修であった。天候は初日から曇りがちで発掘実習の時のみ晴天で、途中雪になるという悪天候になった。しかし、スケジュールの変更もなく、無事研修を終了することができた。

(山口誠治)



世界遺産 竜門石窟にて

## &lt;&lt;&lt; 志紀遺跡の石小刀 &gt;&gt;&gt;

志紀遺跡（その6）は、八尾市志紀町西2丁目に位置する。1993年以来当センターが6次にわたって調査した志紀遺跡の最終次にあたる。

その6調査区では、弥生時代前期末～中期初頭の遺構面、包含層から、尖頭器11点、石小刀15点、石鏃6点と多数のサスカイト副片が出土した。特に弥生時代前期末～中期初頭の溝から打製尖頭器5点と石小刀5点と包含層中から尖頭器3点と石小刀7点がまとまって出土したことが注目できる。これまで石小刀の出土例は遺跡内で数点がほとんどであった。志紀遺跡では出土点数も多く、遺構一括出土例としてよい事例が提供できた。

今回は、この中でも石小刀をとりあげる。石小刀は、弥生時代の前期～中期に近畿地方を中心に盛行した、先端に尖頭部分を持ち、外湾部分の外刃部とその対面の内刃部をもつ、横長の石器である。

形態は刃部が直線的なものと内側に湾曲しているものがあり、内刃に突起がついているもの（写真1）とないもの（写真2、3）がみられる。

志紀遺跡出土の石小刀は非常に丁寧に作られ、薄くすらっとした器形が特徴的である。石材はすべて二上山産サスカイト。製作方法は、素材副片に両側縁から加工を施し、器形を整えてから刃部の細部加工を施している。刃部には2、3mmピッチで鋸歯刃が刻まれたものもある。

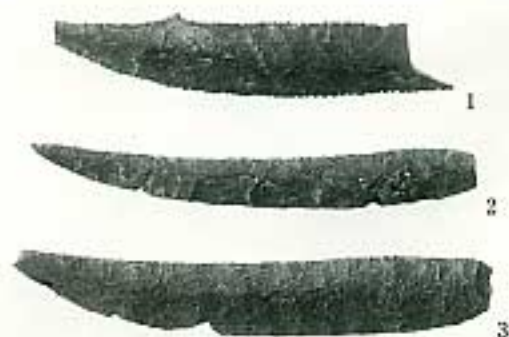
基部は刃部と角度を変えて作り出されている。また、基部端面には、自然面の残るものと折れ面のものがある。共存した尖頭器類の大部分にも同じような折れ面が認められることから、製作段階の折り取りの可能性が指摘できるのではないだろうか。

石小刀は用途のわからない石器である。石小刀として分類されたものでも、形態差があり、一概に同じ用途に使われたとも限らない。打製石剣や石斧が着柄の状態が分かる出土例があるのに対し、石小刀にはそのような事例はない。

志紀遺跡出土例を観察すると、内刃、外刃とも細部調整が施されているが、使用痕跡が顕著ではないため、どちらを刃として使用したか判断が付かない。内湾形の形状から鏃に近いものと想定すれば、内刃でなにかを刈ることのための刃物とも考えられるし、刀子を連想すれば、外刃を刃にして刃物のように使用したとも考えられる。しかし、その場合突起の存在がなぜである。

志紀遺跡では、打製石剣とセットで数点ずつがまとまって出土している。特に、一括して出土したことから何らかの祭祀に用いられ、尖頭器と共に埋納された可能性もあるのではとも感じた。

（野口 舞）



志紀遺跡（その6）出土の石小刀（S=約1/2）

## &lt;&lt;&lt; 平成13年度刊行図書 &gt;&gt;&gt;

